



5月8日に新型コロナウイルス感染症が、2類感染症から5類感染症に変更となった。感染力、感染による死亡率、重度の後遺症をもたらす割合等を総合的に考慮して1〜5類に分類した感染症法に則って、感染拡大を防止する観点に立つて行政は対策を講じてきた。病原性が不明な感染初期と比較して、病原性が判明した現在では、感染者の全数把握が全例届け出から、様式を簡素化すると共に、届け出は4類型に限定、疫学調査・入院措置は全例実施から、高齢者に限定へ、患者・濃厚接触者の行動制限は最大14日間

## 人類に与えられた残りの時間

### — 新型コロナウイルス感染症の緩和策の途上で —

情報広報部長

橋本 はしもと

洋一 よういち

から、患者は最大7日間、濃厚接触者は最大5日間に短縮化を図り、在宅療養者への対処は保健所からの直接連絡から、重症化リスクの高い対象者に重点化し、ICTの活用を図る。水際措置は入国時検査、施設隔離の施行から、緩和措置を講じる。以上のように感染症法上の措置が弱毒化した変異株に対応して徐々に緩和の方向に進めてきた。5類感染症への変更もその一環であると言える。

5類感染症に変更する最大のメリットは、濃厚接触者、無症状か軽症の感染者は自宅療

養の制限を受けることがなくなり、一般人々と同様な社会活動ができることである。しかし、その一方で、濃厚接触者や感染者が増加し、感染が広がるというデメリットも否定できない。いや否定できないどころか、本年4月に4年ぶりに東京で開催された第24回医学会総会でのCOVID-19に関するシンポジウムで、国立感染症研究所のW所長が第9波は必ず来るとし、それは第8波以上のものになり得るというショッキングな内容の講演をされたのは記憶に新しい。5類感染症への

変更は新型コロナウイルス  
ウィルスとの共存  
をめざした緩和方  
向に大きく

く舵を切ったことになるが、今後の感染症の動向予想と矛盾しているようにも思える。

米国の科学雑誌「Bulletin of the Atomic Scientists」(原子力科学者会報)は「人類最後の日」までの残り時間を示す《終末時計》を1947年に創設し、核戦争の脅威について警告を発してきた。人類滅亡の危険性が高まれば分針は進められ、逆に危険性が下がれば分針は戻される。

1989年10月より、核兵器の脅威のみならず、気候変動による環境破壊、猛威をふる

う新興感染症などを考慮して針の動きが決定されている。創設時には残り7分であったが、ゴルバチョフ書記長の登場によりソビエト連邦と東欧の民主化が進み、東西冷戦が終結に向かい、ソビエト連邦が崩壊した1991年には、時計の針は今までの中で最も長い17分前まで戻された。

新型コロナウイルス感染症が中国武漢から世界に蔓延した2020年は1分40秒前まで短縮した。2022年2月に始まったロシアによるウクライナ侵攻は詭弁ならぬ虚言癖を有する指導者によって、過去の世界に前例のない危険な状態を引き起こした。2023年は岸田総理が議長を務めたG7広島サミットで中心議題として取り上げられたウクライナ戦争がより激化することが想定され、終末時計はさらに10秒進み、最も短い残り1分30秒と発表された。

新型コロナウイルス感染症の蔓延とロシアによるウクライナ侵攻には、歴史から学ぶことなく、歴史に翻弄されつづけているという共通の問題点が存在する。人類は増加の一途を辿る自然災害、パンデミック、侵略戦争、内戦をはたして克服できるのだろうか？あと51億年の寿命と言われている地球は歴史から学ぶことができる『過ちを二度と起こさない(原爆死没者慰霊碑の一文)』新しい同伴者の存在を探し求めていくのかもしれない。人類に与えられた残り時間は、まさに1分を切ろうとしている。